



トーマス・ヘル (2023.5.29) © 藤本史昭

**フライブルク・バロック・オーケストラ with
クリスティアン・ベザイデンホウト** (フォルテピアノ)
抜群の相性で魅せる、自由で豊かなアンサンブル 安田和信

トーマス・ヘル (ピアノ) プロジェクト 2025

山根一仁、周防亮介 (ヴァイオリン) / 水野優也 (チェロ) / 谷口知聡 (ピアノ)
竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン、竹泉晴菜 (パーカッション)
才人の開かれた音楽——知と技の鮮やかなる交錯 鈴木淳史

[Schedule 2025.3～8]

[Information]

[Review] パトリツィア・コパチンスカヤ & カメラータ・ベルン
ジョヴァンニ・アントニーニ & イル・ジャルディーノ・アルモニコ

ランチタイムコンサート Vol.133 吉江美桜 (ヴァイオリン) & 原嶋 唯 (ピアノ)

外山啓介 ピアノ リサイタル

Freiburger Barockorchester



Kristian Bezuidenhout

抜群の相性で魅せる、自由に豊かなアンサンブル

安田和信

ヨーロッパにおける古楽、あるいはピリオド楽器演奏の発展を振り返る時、1990年前後の時期はある意味で転換期だったと筆者は考えている。ピリオド楽器演奏が古典派のレパートリーに領域を広げるとともに、それまでのピリオド楽器の中核を担った先進地——イギリスのロンドン、オーストリアのウィーン、ドイツのケルン、はたまたオランダ、ベルギー——に留まらず、他の国・地域でも優れた団体が続々と名乗りを上げたからである。遅くとも1950年代からケルンを軸とした展開が見られたドイツは、全体としてみればそれほど目立つ存在ではなかった。

そのような状況のもと、東西統一を果たしたベルリンのベルリン古楽アカデミー（元々は統一直前の東ベルリンで活動開始）とともに、まさに彗星の如く表舞台に現れたのがフライブルク・バロック・オーケストラ（FBO）であった。ドイツの南西に位置するバーデン＝ヴュルテンベルク州の、これまた南西にあるフライブルクは20万人ほどの都市。周辺を含めた経済圏はともかく都市単体としてはそれほど規模が大きいとは言えないが（前述のケルンは100万都市）、同地の音楽学校で学ぶ有志によって結成されたFBOは、21世紀を迎える前には既にドイツを、否、ヨーロッパを代表するピリオド楽器オーケストラへと急激に成長したのである。

1990年代、筆者は主に彼らの録音を通じてしか活動を知る術がほとんどなかったが、恐ろしいほどに緻密なアンサンブル、18世紀の知られていないレパートリーの積極的な紹介という点で掛け替えのない存在であった。その後のドイツでは様々な都市を本拠とするピリオド楽器団体が現れ、首都圏一極集中になりがちな日本とは異なる「地域主義」的な展開がさらに顕著となっていく。欧州のピリオド楽器団体の国境を超えて腕利きの奏者たちが複数の団体を掛け持ちすることが多いとはいえ、この「地域主義」——政治的統一が比較的遅かったドイツの利点と言わべきだろう——のモデルとなったのがFBOである、としても過言ではない。

「地域主義」と世界的な展開を両立するFBOが、結成当初から破竹の勢いであったことは今更指摘するまでもあるまい。1970年代から、あのニコラウス・アーノンクールが範を示したピリオド楽器とモダン楽器の垣根を取り払う潮流は1990年代以降、むしろ自明となっていた。しかしながら、FBOはピ

リオド楽器の主流を担いながらも、彼らにシンパシーを感じるソリストたちとの積極的な交流を通じて、むしろモダン楽器への歩み寄りをしたとも言えるアーノンクールとは逆に、つまりピリオド楽器への歩み寄りを促したのではない。鍵盤楽器のアレクサンドル・メルニコフ、チェロのジャン＝ギアン・ケラス、そしてヴァイオリンのイザベル・ファウストはピリオド、モダンの違いを超えて名実ともに卓越した演奏家として知られるが、彼らとFBOのコラボレーションはモダンとピリオドの分断を、いわば弁証法的に止揚する最終段階を象徴するのではない。

FBOの「弁証法」は、同様にクリスティアン・ベザイデンホウトとの共演によっても高められてきたと思われる。ベザイデンホウトは何よりもフォルテピアノ奏者としての縦横無尽な活躍が有名であるが、彼はメルニコフ、あるいはアンドレアス・シュタイアと同じようにモダン楽器奏者としての一面も併せ持っている（日本ではNHK交響楽団とも共演）。

ピリオド楽器の演奏を極めようとする専門的な奏者の存在は確かにリスペクトすべきではあるが、彼らはともすると教条的な硬直性（使用楽器をピリオド楽器にひたすら限定することもそう）に陥る危険がある。ベザイデンホウトはそうした狭窄的な視野とは無縁であり、自由に豊かな発想と使用楽器の性能の間でバランスを取りながら、説得力のある解釈を提示してくれるのである。FBOとの相性が悪いわけがないだろう。

さて、今回の来日公演では2種のプログラムが用意された。いずれも18世紀後半の「古典派」に焦点をあてたものだが、その中核がヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）とヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）で、1774年から1784年の10年間に生まれた7曲である。誰もが知る有名曲ばかりとは言えないかも知れないが、特にモーツァルトが神童時代を終えて本格的な作曲家へと成長を遂げて、既に熟達の域にあった先輩のハイドンに勝るとも劣らない作品をもつ時期の名作を並べている。

ハイドンの交響曲第74番は1780年頃の作で、それ以前の彼が時折見せた難解さは背後に退き、親しみやすい旋律が多用されている。当時のハイドンはイギリスやフランスなどの出版社から自作を積極的に出版するようになっており、それ

が肩の凝らないスタイルを生み出したのであろう。

ハイドンの第74番がイギリスの出版社に届けられた1781年、モーツァルトはウィーンへ移住した。今回の公演で披露される作品はそれ以前と以降から各3曲。ザルツブルク時代の交響曲第29番（1774年）は、このジャンルにかなり集中的に取り組んだ1772年から74年の多彩な作品群の一面を見せるに過ぎないが、現代の人も宜なるかなと思わせる充実した内容を誇るだろう。翌年の1775年、ミュンヘンで初演された《偽の女庭師》の序曲は元々2楽章だったが、フィナーレを追加した交響曲のヴァージョンもある。最初から演奏会用に書かれた第29番とは明らかにスタイルや性格が異なり、70年代のモーツァルトの交響曲の多様性を伝えてくれる。

他のモーツァルト作品は全てピアノ協奏曲。ザルツブルク時代のみならず彼の全てのピアノ協奏曲の中でもユニークな特徴——第1楽章冒頭でいきなりソロが現れることなど——を持つ《ジュノム》、ウィーン移住直後にピアニストとして売り込むために書かれ、専門家も素人も同時に楽しめると自負した第13番と《ロンド イ長調》（これは未完に終わったが、元々は第13番の姉妹作である第12番イ長調の終楽章として意図されたもの）、そして、光と影のコントラストが見事な効果を生む第17番と、必ずしもポピュラーではないとはいえ、モーツァルトのファンには「ご馳走」がずらりと並んでいる。

この両巨人とともに、あのバッハの末子ヨハン・クリスティアン・バッハ（1735-1782）の作品を聴くことができるのも今回の公演の魅力である。クリスティアンは何よりも少年時代のモーツァルトがロンドンで出会い、終世尊敬の念を失わなかった作曲家として知られている。Op.6は1770年初版だが、それ以前に作曲された可能性が大いにあり、もしかしたら1760年代半ばのヴォルフガングが知っていたかも知れない。全楽章が短調を採る異例のト短調、快活を絵に描いたようなト長調はまさに対照的だが、やはりモーツァルトがシンパシーを感じたことが頷ける2作である。これらがFBOの演奏で聴ける喜びは格別には違いない！ 今から春の到来が待ちきれない。

（やすだ・かずのぶ／音楽評論家）

トッパンホール初登場の公演より



フライブルク・バロック・オーケストラ／2016年10月



クリスティアン・ベザイデンホウト／2012年5月

フライブルク・バロック・オーケストラ with クリスティアン・ベザイデンホウト（フォルテピアノ）

2025年4月3日（木）19:00

モーツァルト：オペラ《偽の女庭師》K196より 序曲
ハイドン：交響曲第74番 変ホ長調 Hob.I-74
モーツァルト：ピアノ協奏曲第17番 ト長調 K453
ヨハン・クリスティアン・バッハ：交響曲 ト短調 Op.6-6
モーツァルト：ピアノ協奏曲第9番 変ホ長調 K271《ジュノム》

2025年4月5日（土）18:00

モーツァルト：交響曲第29番 イ長調 K201（186a）
モーツァルト：ピアノと管弦楽のためのロンド イ長調 K386
ヨハン・クリスティアン・バッハ：交響曲 ト長調 Op.6-1
モーツァルト：ピアノ協奏曲第13番 ハ長調 K415（387b）

（各日）11,000円／U-25 5,500円 全席指定

助成：ゲーテ・インスティトゥート

〔ベザイデンホウト使用楽器〕

ポール・マクナルティ（2002年作）によるアントン・ワルター・モデル（1800年頃）

才人の開かれた音楽に聴く 知と技の鮮やかなる交錯

鈴木淳史



知性派ピアニスト、などという言葉を目にすると、小難しい曲を色気もなくきっちり弾く姿を思い浮かべてしまいがちだ。いや、真の知性とは、凝り固まったものをほぐし、愉悦感を生じさせるもの。トーマス・ヘルは弾くピアノを耳にすると、そんな定義を言ってしまうことになる。

立体的に響きを作り出し、作品のすみずみまで光をあてる。どちらかといえば響きは硬質とでもいいけれど、カラリと明るい和音を紡ぎ、その運びにも閉塞感というものがない。

ハンブルク生まれのこのピアニストは、2016年にトッパンホールに初登場、リゲティの《エチュード》全曲を演奏した。2018年にはシューマンの《クライスレリアーナ》とアイヴズの《コンコード・ソナタ》を弾く。2022年にも来日、ベートーヴェンの《ディアベリの主題による33の変奏曲》をメインにしつつ、ハイドン、権代敦彦、矢代秋雄の作品と組み合わせるといって、意外性あるプログラムを披露している。いずれも、構築性を鮮やかに示しただけでなく、作品内部にくつと踏み込んだ演奏が評判を呼んだ。

そして、2023年には、生誕100年を迎えたりゲティを取り上げた2夜の演奏会にキーマンとして登場。再び《エチュード》を弾いたほか、ピアノ三重奏曲などでアンサンブルにも加わった。

ヨーロッパでも、室内楽に積極的に取り組んでいるヘル。彼の「開かれた」音楽性は、アンサンブルでより効果的に発揮されるのかもしれない。スペシャリストたるヘルを中心に、初めてリゲティに挑戦するホープたちまで、じつにみずみずしく、この作曲家の多様な魅力を掘り出してくれたコンサートになった。この年は、ヨーロッパ各地でもリゲティをテーマにした演奏会が行われたはずだが、プログラムと演奏のレベルの高さにおいて、それらをしのぐ満足度を誇ったのではないか。

そのヘルがトッパンホールでの新たな企画に挑む。「トーマス・ヘル プロジェクト 2025」では、2つのプログラムを用意。その示唆に富んだプログラムがうれしい。

第1夜(5/26)の「リゲティ&バルトーク」では、トーマスお得意のリゲティを入り口として、この作曲家が影響を受けたバルトークの作品が演奏される。

まずは、ヘルはピアノ独奏による、リゲティの《ムジカ・リチェルカータ》。西側へ亡命前の代表作で、民族的なエッセンスを香り立たせつつも、それがときに軽妙かつ洒落っ気のあるモダンなスタイルと溶け合っている。第9曲はバルトークの思い出に捧げられた曲でもある。

民族性を新しい音楽へと昇華させるのは、まさにバルトークの作曲家としてのライフワークだった。これを若かったリゲティが引き継ぎ、生み出したのがこのユニークな《ムジカ・リチェルカータ》だった。才気をほとばしらせたヘルはピアノを存分に堪能できる曲だ。

プログラムは、バルトーク作品へと移る。ヴァイオリン・ソナタ第2番は、山根一仁とヘルによるデュオ。この曲は、どちらかといえば、ヴァイオリンに民族的なもの、ピアノにモダニズム的な要素が分担されている箇所が少ない。シャープに作品に斬り込んでいく山根と、それをクールかつ柔らかく受け止めるヘルとの掛け合いには注目だ。

この日の最後は、バルトークの2台ピアノと打楽器のためのソナタが演奏される。トッパンホールの舞台狭しと広がる、2台のグランドピアノに、ティンパニやバスドラム、シロフォンなどを含む打楽器。そこから放たれる、多彩なリズムと音色。4人の息の合ったアンサンブルが要求される難曲でもある。

ピアノはヘルに加え、フランスを中心に活躍する俊英、谷口知聡。打楽器は、スウェーデンで活動し、セイジ・オザワ松本フェスティバルにも参加している夫妻、竹原美歌とルードヴィッグ・ニルソン。特殊すぎる編成ゆえに、なかなか演奏会で取り上げる機会に恵まれない作品を一体感のあるアンサンブルで聴かせてくれるはずだ。

第2夜(5/29)は、「バッハ&ショスタコーヴィチ」。2つのショスタコーヴィチの室内楽曲のあいだに、バッハの鍵盤曲を挟み込んだプログラムだ。ちなみに、ショスタコーヴィチには、バッハへのオマージュともいえる《24の前奏曲とフーガ》という作品もある(今回のプログラムに入っていないが、最大のアンコール候補といえるだろう)。

1曲目は、ショスタコーヴィチのピアノ三重奏曲第2番。親友の死を悼んで書かれたこの作品は、ストレートな悲しみと哀悼、死の舞踏を思わせるような終楽章のロンド主題など、変化にも富んだ音楽が成熟した筆致で描かれている。

対象に入り込み、あるいは憑依するようなヴァイオリンを聴かせる周防亮介、表現への意欲の強さを誇る水野優也のチェロ、そこにヘルはピアノが加わる。個性の強い3者が織りなす、刺激に満ちた演奏になることは間違いない。

そして、ヘルはピアノ独奏でのバッハの《トッカータ 二長調 BWV912》。バッハのトッカータといえば短調作品のほうに目が行きやすいが、二長調の明朗な雰囲気を出したこの曲を演奏することで、ショスタコーヴィチ作品と明暗による対比をもたらすはずだ。同時に、融通無碍な変化と豊富

なアイデアをもつこの《トッカータ》は、前後に置かれたソ連人作曲家の作品と相通じるものもある。対比と共通性を兼ね備え、プログラムの流れに幅を作る、なかなかセンスのいい選曲ではないか。

そして、今回のプロジェクトのオオトリとして登場するのは、ショスタコーヴィチの交響曲だ。もちろん、フル編成のオーケストラは舞台に乗り切らない。弦楽三重奏と打楽器のための室内楽版(テレヴィアンコ編曲)による交響曲第15番だ。ピアノ三重奏曲を演奏したメンバーに、竹原美歌とルードヴィッグ・ニルソン、竹泉晴菜による打楽器陣。第1夜のバルトーク作品に引き続き、打楽器の音色がホールをいつもと違った空間に変えるだろう。

作曲家の最後となった交響曲には、神秘とシニカルさが渦巻く。ロッシェニの《ウィリアム・テル》序曲や、ワーグナーの《神々の黄昏》からなどのおびただしい引用、ルネサンス風のカノンや12音技法も使われ、時だけが刻まれていくような謎めいた終楽章のコーダで終わる。極めて室内乐的だったオーケストレーションゆえに、この室内楽版でも、原曲のイメージはそのまま。ただし、悪戯のように響くはずのアイロニーは、それを作り出した作曲家の内面を掘り返すように、より生々しい姿を表すはずだ。

すべてがトッパンホールならでは。没後50年を迎える作曲家にとって、究極のアニバーサリー企画になるかも。

(すずき・あつふみ/音楽評論家)

トーマス・ヘル プロジェクト 2025

I リゲティ&バルトーク

2025年5月26日(月) 19:00

トーマス・ヘル(ピアノ)
山根一仁(ヴァイオリン)/谷口知聡(ピアノ)
竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン(パーカッション)
リゲティ:ムジカ・リチェルカータ
バルトーク:ヴァイオリン・ソナタ第2番 Sz76
バルトーク:2台ピアノと打楽器のためのソナタ Sz110

II J.S.バッハ&ショスタコーヴィチ

2025年5月29日(木) 19:00

トーマス・ヘル(ピアノ)
周防亮介(ヴァイオリン)/水野優也(チェロ)
竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン、竹泉晴菜(パーカッション)
ショスタコーヴィチ:ピアノ三重奏曲第2番 ホ短調 Op.67
J.S.バッハ:トッカータ 二長調 BWV912
ショスタコーヴィチ(テレヴィアンコ編/室内楽版):交響曲第15番 イ長調 Op.141a

(各日)6,500円/U-25 3,000円 全席指定

2公演セット券11,180円/トッパンホールクラブゴールド会員9,880円

特別協賛:株式会社 竹中工務店

日時	公演
3/10 (月) 19:00	Trio Rizzle Vol.4 毛利文香(ヴァイオリン)/田原綾子(ヴィオラ)/笹沼 樹(チェロ) 特別協賛: 株式会社 竹中工務店
3/26 (水) 19:00	エペーヌ弦楽四重奏団 特別協賛: 株式会社 安藤・間
3/27 (木) 19:00	ベルチャ・クアルテット 特別協賛: 東急建設株式会社
3/28 (金) 19:00	ベルチャ・クアルテット×エペーヌ弦楽四重奏団 特別協賛: 鹿島建設株式会社
4/3 (木) 19:00	フライブルク・バロック・オーケストラ with クリスティアン・ベザイデンホウト(フォルテピアノ)
4/5 (土) 18:00	
5/26 (月) 19:00	トーマス・ヘル(ピアノ) プロジェクト 2025 I リゲティ&バルトーク 山根一仁(ヴァイオリン)/谷口知聡(ピアノ)/竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン(パーカッション) II J.S.バッハ&ショスタコーヴィチ 周防亮介(ヴァイオリン)/水野優也(チェロ) 竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン、竹泉晴菜(パーカッション) 特別協賛: 株式会社 竹中工務店
5/29 (木) 19:00	

日時	公演
6/25 (水) 19:00	トマシュ・リツテル(フォルテピアノ)
6/28 (土) 17:00	アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)
8/5 (火) 19:00	クアルテット・インテグラ II 特別協賛: 株式会社 竹中工務店
<ランチタイムコンサート> トッパンホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]	
4/18 (金) 12:15	Vol.133 吉江美桜(ヴァイオリン)&原嶋 唯(ピアノ) 歌心が結ぶ、近くも遠きふたりの音楽家
6/12 (木) 12:15	Vol.134 本堂峻哉(ピアノ) 重なり合う宇宙に響く「雨の木」

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2025年2月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

Review “いま”を息づく鮮烈な音楽——時代の2トップが躍動した充実の3夜



Patricia Kopatchinskaja

Camerata Bern



Giovanni Antonini

Il Giardino Armonico

思い入れの詰まった2組のアーティストを招聘した昨年12月、いかにもトッパンホールというべき3公演が実現できた。2017年にコパチンスカヤと相談しながらもコロナ禍で2度涙をのみ、今回はホールが核となって国内ツアーをまとめたカメラータ・ベルン公演。《死と乙女》のライヴ・パフォーマンス(12/7)は、会員をはじめ多くの皆さまの熱い支持を得て、発売とほぼ同時に完売という高い期待のなかで幕を開けられたのが何よりうれしかった。創意工夫に満ちた50分のドラマは、音楽を超え、時代を超えて、人が共感できるクラシック音楽の魅力を遺憾なく伝えることが出来たように思う。カメラータ・ベルンの矜持とメンデルスゾーンの清新さが交錯した2日目(12/9)のプログラムはトッパンのために編まれたもの。そんな彼らの心意気がうれしい。特筆すべきはそのリハーサル。コパチンスカヤを含め14人全員が自由にアイデアを交換し、みんなでひとつひとつ検証しながら諸否を決定する。まるでパトリツィアの他に13人のミニ・コパチンスカヤがいるかのような発想

豊かな自在な時間だった。私も、暗転のなか客席から登場するアイデアを提案、採択された。埼玉、京都の2公演では《死と乙女》のライヴ・パフォーマンス版が採用されなかったのが個人的には惜しまれた。とはいえ、2007年の日本デビュー・リサイタル以来、トッパンホールを舞台にコラボレーションを続けてきたコパチンスカヤを、今回は地方にも展開できたのは収穫のひとつ。次回公演もご期待。
京都から戻るとすぐに新たなリハーサルが待ち受けていた。ハイドンを隠れテーマに掲げた2024/25シーズンの白眉、イル・ジャルディーノ・アルモニコ公演(12/13)だ。コンサート冒頭に本公演のために置かれたモーツァルトの《ディヴェルティメント》K136は、彼らにとってはレアなプログラムとのこと。その後ホールに吹き荒れるアントニーニ&イル・ジャルディーノ・アルモニコ旋風と日本の聴衆との橋渡しをするかのような役割を担った。そして《Trauer》と名付けられた本編が開始され、彼らのハイドンを炸裂した。まさに疾風怒濤、ハイドンの音楽の

中に眠るドラマ、心の葛藤やざわめきを白日の下に晒し、ハイドンの端倪すべからざる魅力を我々の眼前に提示する。ハイドンの音楽を身に纏い、ダンサーのようにステージを激しく舞うマエストロだが、本番の自在な演奏とは雰囲気をもまったく異なる厳格なリハーサルも印象的。リハ中の団員の緊張感は大抵ではない。その緊張感はその演奏からは絶対に想像できないが、それが本番での自由な表現を生んでいるのは、超一流アーティストに共通の資質だ。それにしても、コパチンスカヤ&カメラータ・ベルンとはまさに対極の姿だ。ニーチェにまで話が及んだマエストロとの芸術談義も忘れ難い。彼らもトッパンでの公演は深く心に刻まれたようで、次回についても前向きな話が進んだ。
時代をリードする室内楽アンサンブルの2つの極とことごとく向き合った1週間は、改めてコンサートを創る意味と意義を見つめ直す充実の時間になった。皆さまはいかがでしたか?
(西巻正史/プログラミング・ディレクター)

演奏家と作曲家を結ぶ、音楽への想い

次世代を担う新たな才能との出会いの場として人気の<ランチタイムコンサート>。4月は、ともに桐朋学園出身で共演歴もある、吉江美桜(ヴァイオリン)と原嶋唯(ピアノ)によるデュオをお届けします。
室内楽やオーケストラなどで幅広く活躍する吉江は、昨年のエリザベート王妃国際音楽コンクールでセミファイナルまで進んだ実力派。歯切れよく爽やかなタッチでしなやかに歌い上げる音楽が持ち味です。一方の原嶋は、内に秘めた想いを表情豊かに奏でる、トッパンホールお馴染みのアーティスト。ステージに立つたびに目覚ましい成長の軌跡を刻み、なんといつてもホルンの特性を活かして音楽を奏でることに長けたピアニストでもあります。今回は、同時代を牽引しながらも対照的な浪漫派2巨匠の《ヴァイオリン・ソナタ第1番》に挑みます。なお、吉江は今回がシューマン初挑戦。タイプの異なる演奏家が奏でるシューマン&ブラームスに、どうぞご期待ください。



<ランチタイムコンサート Vol.133>
吉江美桜(ヴァイオリン)&原嶋 唯(ピアノ)
歌心が結ぶ、近くも遠きふたりの音楽家
2025年4月18日(金) 12:15
シューマン: ヴァイオリン・ソナタ第1番 短調 Op.105
ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ第1番 長調 Op.78 《雨の歌》
入場無料(要予約/お一人様2席まで)
受付期間: 2025/3/7(金)~3/28(金)
お申し込み方法: ハガキ(抽選制・当選者のみ通知)
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
トッパンホールチケットセンター
「ランチタイムコンサート Vol.133」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

外山啓介の“音”に染まる、プレミアムなひととき

デビューから18年、ますます充実した音楽活動を展開しているピアニスト、外山啓介。ここ数年は、毎年トッパンホールでリサイタルを開催しており、彼の描き出す世界をよりインテリジェントに受け取ることができると、多くのお客様に賑わっています。
「ベートーヴェンが人生をかけて辿り着いた様式と深遠な音楽性に挑みたい」と、今回メインに据えたのは、ベートーヴェン晩年のソナタから第30番と第31番。常に作品と真摯に向き合う外山の、作曲家と音楽に向ける敬意と、お客様へのメッセージが感じられるプログラムになりました。リサイタルの前に「皆さまと素晴らしい音楽を通して時を共有させていただくことを心から楽しみにしております」と、聴衆を大切にしている彼らしい言葉が寄せられています。
学生時代に挑み第1位に輝いた日本音楽コンクールの予選会場でもあるトッパンホールは、外山にとって思い入れ深い場所。昨年の日本音楽コンクールで、審査員としてトッパンホールに戻ってくることで、「この上ない幸せ」だったそう。外山の熱い挑戦の歴史が刻まれてきた特別なステージで聴くベートーヴェン。心ゆくまで堪能ください。



外山啓介 ピアノ リサイタル
2025年3月20日(木・祝) 14:00
ドビュッシー: 《前奏曲集 第1集》より《沈める寺》
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第30番 長調 Op.109
リスト: 《巡礼の年 第1年 スイス》より《オーベルマンの谷》
ドビュッシー: 《12の練習曲》より
(5本の指のための(チェルニー氏による))
ドビュッシー: レントより遅く(ワルツ)
ドビュッシー: 夜想曲
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 Op.110
全席指定: 6,000円
主催: インタースペース
お問い合わせ: チケットスペース 03-3234-9999
チケットのお申し込み: トッパンホールチケットセンター

表紙: トーマス・ヘル

超人的技巧と深い音楽性で聴衆を沸かせてきた、ヘル。そのすべてのステージは忘れがたい伝説として強く記憶に刻まれてきました。前回公演より、現代音楽の巨人・リゲティの遺産を真剣な眼差しで紐解く、印象的なカットを。この5月には、日本の俊英とのプロジェクトで、彼の異次元の至芸に再び触れる機会がやってきます。さらなる伝説を、どうぞお聴き逃しなく。

編集後記

新しい年が始まり早2か月が経とうとしています。トッパンホールはとも濃密なニューイヤーコンサートで、幸先良く新年を幕開けしました。個人的なことで大変恐縮ですが、今年に入って急に編み物に目覚め、寝る間も惜しんで毛糸と戯れています。一本の糸が複雑に絡み合いひとつ

の作品に姿を変えていく過程は、なるほど音楽とよく似ているな...と気づかれます。10月には25周年を迎える本年、トッパンホールプレスでもひとつひとつの言葉を丁寧に編み上げ、心を込めて大切なお知らせをお届けしてまいります。お手に取っていただけたら嬉しいです。(ゆ)